物狂の能について

1いとぐち　2物狂の要素　3佯狂　4引例　5物狂の遊藝性
6物狂にあらはれた文藝精神　7むすび

岩見　護

1

單語としての「物狂」は狂氣のことをいふのであり、倭名抄には病の類の中に「癲狂、毛乃久流比」として出してある。しかし人間生活にあつては、眞の狂氣と斷定するところまでゆかなくても、「心も狂ひさうだ」と自覺する場合があり、狂氣に比すべき狀態をあらはすことがあり、場合によつてはわざと狂氣のやうに振舞ふこともある。そこで、そゞろなる心を「ものぐるほし」といひ、常規を逸した行動を「ものぐるほしきやう」などといふ表現をすることになるのは、昔も今も同樣である。

よきにつけ惡しきにつけ、人間の心は屢々高揚して常規を逸する。それは藝能の上にあつては、頗る多彩多樣の變化を示しつゝ、內部にある心緒を表現することのできる絕好の題材である。世阿彌は物ぐるひの能について「此の道の第一の面白づくの藝能なり……思ひ故の物狂をば如何にも物思ふ氣色を本意に當てて、狂ふ所を花に當てて、心を入れて狂へば、感も面白き見所も定めてあるべし」（風姿華傳第二）といつて、物狂の能の面白さ第一のものなることを述べ、また「上果風より貴人・白拍子・曲まひ・狂女色々を心得分けて、其の藝道の筋目々々をあてがひて作書すること、よく能道を知りたる書手なるべし」（能作書）といつて、狂女を大切な題材の一としてあげてゐる。從つて能に於いて「物狂」とりわけ狂女物が重要な位置を占め、またその影響を受けた操淨瑠璃や歌舞伎でも「狂亂物」が主要な見せどころとして組

み入れられてあることは、人の知るところである。

本稿では能を中心として少しく「狂」の藝術的意義と藝能的由來とについて考察してみようとするのである。

2

能は神祕的夢幻的なものから、次第に現實的寫實的のものの方へ進んできたことは、四番目物の數が壓倒的に多いことでも察せられる（例へば各流現行能を通じて修羅物が十六番しかなく、殆ど世阿彌時代にあつたまゝといつてもよいのに比し、四番目物は八十四番を數へることができるのを見てもこのことは明かである）。

しかしながら田樂猿樂以來の物眞似の本領が、四番目物を中心として繼承せられてあるにしても、能によつて創造せられた夢幻劇的美しさといふもの、また世阿彌によつて高い價値を附與せられた幽玄（優妍）の美といふものが捨てられたわけではない。この寫實的要求と夢幻的要求との中間に創造せられて、一種獨特の狂亂美ともいふべきものをあらはして、三番目物（鬘物）の幽玄美を、今一度形を變へることによつて、四番目で見せようとしたものが物狂の能、ことにその代表的な狂女物である。

現行能の中で女物狂としては、班女・加茂物狂・花筐・櫻川・三井寺・柏崎・隅田川・籠太鼓・百萬・卒都婆小町を主なものとし、やゝ狂態は稀薄ではあるが、雲雀山・水無月祓・飛鳥川・玉葛・浮舟・三山・蟬丸・富士太鼓・梅が枝をも加へて十九番を數へることができる。また男物狂では、高野物狂・蘆刈・土車・歌占・木賊があり、狂態は稀薄であるが弱法師をも加へれば六番を數へる。女物狂が十九番で男物狂が六番であるから、物狂の代表的なものは女物狂であるといふことがいへる。そして狂女物は同じ四番目物の中の執念物とともに、女を中心とする能として、鬘物の延長又は形のかはつた再現といふことになる。これによつて世阿彌の說いた「二曲二體」のうちの女體といふものの能に於ける重さが知られる。

さて以上の狂亂物について、狂亂することの內容を要素によつてわけてみれば、第一にあげることのできるのは人情的要素である。戀愛の破綻とか、恩愛の悲しみとか、心も狂はずにをられぬ悲劇的な事件が主人公を狂亂せしめるのである。班女・水無月祓・加茂物狂・花筐・蘆刈・三山・籠太鼓・富士太鼓・梅が枝は何れも戀慕の情からの狂亂である。飛鳥川・櫻川・三井寺・柏崎・隅

田川・百萬・木賊は何れも失つた子を思ふ親心からの狂亂である。雲雀山・高野物狂・土車は主君を思ふ故の狂亂で、これは單なる人情といふよりは、特に封建時代の姿を反映した人情といふやうなものである。その他のものでは、玉葛は若い女の惱みから、浮舟は物の怪に憑かれて、蟬丸の逆髮は身の因果から、卒都婆小町は我が所行の報いから、弱法師は境遇から、歌占は神懸り的なものといふわけで必ずしも人情的とはいへぬが、多くのものは人情の傷みからの狂で、それを代表するものが戀慕と恩愛との二つである。この二つが舞臺劇の主要題目であることには、昔も今も變りはないのである。

次に感じられるのは藝能的要素である。これはどの能にも共通してゐるのであるが、人情的要素の強いものについては藝能的要素は見落されるのであるが、中には人情的要素よりも狂亂の舞を奏せしめることが中心になつてゐるものもある。櫻川の如きはそれで、櫻川に浮ぶ花片をすくひとる所作の美しさのために、それを中心として物語も所作も構成せられたのではないかと思はれる。能を舞臺の演出において見るならば、何れの能もみな舞臺の美を中心として演出せられるので、ストーリーはそのための手がゝりに過ぎぬといふことが感じられる。この點から云へば藝能的要素が第一の要素であるといつてもよい。

第三の要素は、文學的思想的な要素である。それを代表するものは三井寺で、子を失うた母の狂亂から鐘をつくところに、突如として賈島の詩を引き「詩狂」について語らせてゐる。しかもこれは決して作ゆきの亂れではないので、あの場合、人情の悲劇の中にあつてそれを忘れ超えてゆく詩的世界を、月光を媒介として打ち開いて見せようとしてゐるのである。ひとり三井寺にかぎらず、我々が能を見る時、隨處に打ち開かれてゐる詩的世界を感じるのである。

以上三つの要素が綯ひ合されてできてゐるのが狂亂物である。少くとも前の二つの要素なくしては物狂の能は成立しないのである。もとよりこのやうなことは、物狂の能だけには限らぬであらうけれども、特に物狂において二つ又は三つの要素の綯ひ合せられてゐることが強く見られるのである。特に人情的要素と女物狂とは不可分の關係にあることはあへて說明するまでもないことであらう。女物狂は濃厚な人情的要素によつてその哀婉の情趣を發揮しその藝能的（舞踊的）要素に精彩あらしめてゐるのである。

3

能の物狂には一つの共通した著しい特徴がある。それはどれもみな一時の狂であり假の狂であつて、やがてみな正氣に復するといふことである。これを大別すると二種になる。一つは「狂へ」といはれ「狂ひませう」と答へ、又は自覺して狂ふのであり、神又は貴人の前で狂うて御覽に入れるといふことになるのである。これは「狂氣」ではなく「遊藝」として狂ひ舞ふことを示してゐる。いま一つは心の憂悶や激動によつて心が狂ふのではあるが、事件が解決するとともに正氣に復してめでたく納まるのである。この二種の型を一番の能の中に併存してゐるものもある。櫻川や三井寺はその代表的のものである。

現實の世界にあつては、一たび狂氣したものが、再びはもとにもどらぬ。事件がたとへ解決しても狂うた心は生涯そのまゝだといふ場合は非常に多い。然るに能では隅田川のやうな悲劇的結末に遇うてゐる母でさへも、狂は一時の狂で、最後は正氣に復つてゐるのである。能においては狂じたものが最後まで狂じたまゝといふことは一つもない。このことは、能が寫實的な藝術ではないからだといふことの外に、能成立の由來や、演出上の效果を考へた上からの必要など、いろいろの理由を持つてゐるやうである。

それは藝術に於ける「狂」の意義といふ興味多い問題でもある。こゝでは「狂」とはもはや醫學的な對象ではない。「ものくるひ」とは精神病者のことではあるが、その樣態を手がかりとしてあらはさうとするつきつめた亂れた心情と行動とが藝術上の狂である。實際の狂と藝術上の狂とは紙一重の相違であり、それ故、凡庸畫家の描き得ぬ自然の眞髓をつきつめて描き得た畫家が、やがてそのまゝ狂者になつたり、同樣の詩人がやがてそのまゝ狂者になつたりした例はいくつもある。しかし狂そのものは藝術ではない。人間を狂氣にまで至らしめる程の生活內容が、とり出され表現せられて、人を感動せしめる程の美的昇華を遂げなければ藝術にはならぬ。能の物狂が狂の表現であつて、狂そのものではないといふところに藝能としての意義がある。物狂が眞の狂ではなく、假狂若くは「時々は現なき風情」になる一時の狂たる所以である。

そもそもまた詩人も畫家も音樂家も、彼等はすべて狂氣なのではないか。藝術するといふことは「ものに狂

ふ」ことではないのか。市井凡常の生活そのまゝから藝術は生れてこない。その凡常を破つて出てくるものが藝術である。天才者には狂ひ咲きの大輪の朝顔のやうに、內部から破裂して出てくるものがあつて、屢々勝れた藝術作品を生んでゐる。市井凡常の我々の內にも、その凡常にあきたらず、狂ふやうにそれを破りたいものを持つてゐる。それが藝術作品に接することによつて、自覺させられたり滿足させられたりする。

一面から見れば人間はみな忍土の有情で、耐へ忍んで暮してゐる。泣きたいこと、喚きたいことがたくさんある。訴へたいけれども訴へるところもなく、訴へるすべもないものを內に抱いてゐる。「狂」はそのやうなものの積り積つてできた苦悶・絕望等のつきつめた破局的狀態の表現である。從つて能の物狂はすべての人の心の中に積つてゐるさうした心中をあらはし、或は象徵して、强烈に印象せしめ感じさせることができる。世阿彌がこれを重要な藝の一要目としてあげ用ゐてゐる所以であらう。

單純に高揚した心情において踊り狂ふやうな古代的な「ものくるひ」は能の時代においてはもはや傳承としてしか存在しなかつた。新しい藝能としては、それに當代人の複雜な生活感情から來るものがとり入れられねばならぬ。失戀や、恩愛や、などの哀切な生活體驗がそれである。このやうなつきつめた破局的心情の表現たる狂氣と、傳承的な藝能としてのものぐるひとの混合、若くは調和の上に能の物狂は成り立つてゐるのである。それがいつも實在的寫實的な狂人からひきもどしひきもどしつゝ、「藝」としての狂氣を表現してゐるのである。

なほ舞臺表現としての狂の意義は、物狂ならぬものに比べて、變化に富み、印象が强烈であるといふ點にある。それは人の意表外に、常態を破つて、奔放自在に演出することができる。これは世阿彌の所謂「花」を咲かせる最もよい材料である。

悠久の昔から、感を發したり興極まつたりすれば立つて踊り狂うたのである。古事記だけにでも我々は多くの例を見出すことができる。これは田樂や猿樂の源流であらう。さればいま能もまたその「狂ひ」をこゝに再現しようとしてゐる。それがわざと神や貴人の前に狂うて見せる所以である(それについては5で細說する)。しかし能全體として見れば「踊り狂ふ」狂の外に哀傷極まれる心情から發した狂氣がとり入れられた。そして更にいま一つ忘我遊神の超現實世界が狂に托してあらはされ(こ

れについては6で細説する）、この二つが能に於ける文藝的理念として附加せられてある。

便宜上次節4に實例をまとめであげたのであるが、それらは何れも能の狂が一時的の狂、假の狂であることをあらはしてゐる。イ、ロ、ハ、ニ、ト、リ、ヌ、ル、ヲ、ワ、カ、などは假りの狂であり、藝能的、みせもの的狂舞である。ホ、チ、ヨ、及びこゝに言葉としては出してないが卒塔婆小町などはみな一時的な狂である。また櫻川（ニ）三井寺（ホ）隅田川（ト）百萬（リ）などはみせもの的な要素と悲劇的狂氣の要素との併存したものである。

4

イ　水無月祓

ワキ　いかに申し候。この烏帽子を召されて面白う舞うて御見せあれと人々の御所望にて候。

シテ　げにや臨時の祭にはかざしの花を賜はるとかや。わらはも烏帽子をうち着つゝ、神の御前に狂はまし。

ロ　加茂物狂

ワキ　いかにこれなる狂女、今日は當社の御神事なり心を靜めて結緣をなし候へ。

ワキ　いかに狂女。この社にて舞を舞ひ、思ふ事を祈るならば、神もや納受あるべきぞ。

ハ　花　筐

ワキ　いかに狂女、宣旨にてあるぞ。御車近う參りて、いかにも面白う狂うて舞ひ候へ。叡覽あるべきとの御事にてあるぞ。急いで狂ひ候へ。

シテ　嬉しやさては及びなき御影を拜みや申すべき。いざや狂はん諸共に。

ニ　櫻　川

（狂言）里人　又こゝに面白き事の候。女物狂の候が、美しき抄ひ網を持ちて櫻川に流るゝ花をすくひ候が、けしからず面白う狂ひ候。

ワキ　さらばその物狂ひを此方へ召され候へ。

同　いかに申し候。この物狂は面白う狂ふと仰せ候が、今日は何とて狂ひ候はぬぞ。

ホ　三　井　寺

シテ　のうこれは物には狂はぬものを。物に狂ふもあの稚兒ゆゑなれば、逢ふ時は何しに狂ひ候べき。

ヘ　柏　崎

シテ　夫には死しての別れとなり、今ひとり忘れ形見と

も思ふべき、子の行方をも白絲の、亂れ心や狂ふらん。

ト　隅田川

ワキツレ　あれは昨日の泊りにありし女物狂にてありげに候。

ワキ　たとへ都の者なりとも、狂女ならば面白う狂へ。狂はずば舟には乘すまじいぞ。

チ　籠太鼓

ワキ　やあいかに女、何故さやうに狂氣してあるぞ。

シテ　何故狂氣するぞと承る。人の心の花ならば、風の狂ずる故もあるべし。況や階老同穴と契りし夫も行方しらで、殘る身までも道せばき、なほ安からぬ籠の中、思の闇のせん方なさに、物に狂ふは僻事か。

リ　百萬

アヒ　面白きこと數多御座候中にも、こゝに百萬と申す女物狂の候が、われらが念佛を申せば、もどかしいとあつて出でられ、おもしろう音頭を取り申されて候。

ワキ　さて何故にさやうに狂氣とはなりたるぞ。

シテ　子に生きて離れてさむらふほどに、思ひがみだれて候。

ヌ　高野物狂

シテ　これは放下にて候。歌をうたひ放埒したる物狂にて候。

シテ　いつも常磐の三鈷の松蔭に、立寄る春の風狂じたる物狂。あら忘れや。高野の内にては謠ひ狂はぬ御訓戒を、忘れて狂ひたり。宥させ給へ御聖。

ル　蘆刈

シテ　これはまた、難波女のかづく袖笠肘笠の、雨の蘆邊も亂るゝかたを波、あなたへざらり、こなたへざらり、ざらりざらり、ざらざらざつと、風のあげたる古簾、つれづれもなき心、おもしろや。

ヲ　土車

シテ地　聲をあげて叫べども、父とも答へず、あはれとだに知らざれば、よしそれまでぞ、ささらも八撥（やつはち）をも打ち捨てゝ狂はじ、皆うち捨てゝ狂はじ。

ワ　弱法師

シテ地　足もとはよろよろと、げにもまことの弱法師とて、人は笑ひたまふぞや。思へば恥かしや。今は狂ひ候はじ、今よりは更に狂ひ候はじ。

カ　歌占

ツレ 承り候へば地獄の有様を曲舞に作りて御謠ひある
由申候ほどに、お謠ひあつてお聞かせ候へ。
シテ 易き御事にて候。さりながらこの謠を謠ひ候へ
ば、少し神氣（かみけ）になり候。しかれども、方々（かた）名殘の
一曲に、現なき有様見せ申さん。

ヨ 木　賊

狂言オモヅレ いかに御僧たち、御心易く御座候へ。今の尉殿
は少し身に思ひの候ひて、時々は現なき風情の
候。その時は心得あつて御あひしらひ候へ。

……

タ 自然居士

シテ 鼓をまた打ち、ささらをなほ擦り、狂言ながらも
法の道。

レ 花　月

シテ かやうに狂ひめぐりて心亂るゝこのさゝら、さら
さらさつと、すつては謠ひ、舞うては數へ。

5

右の例文を一見しただけで、物狂の能には遊藝的な要素が非常に多くとり入れられてあるといふことがわかるであらう。その中でも櫻川や三井寺や隅田川や百萬は何れも我が子を失うた母親の恩愛故の狂亂であるから、我が子に廻り逢うた後に狂亂から覺めるといふ構想はともかく、それまではひたすらの狂亂でなければならぬのに、その途上において狂ひ舞うてそれを見せものとし、人々もまた「狂うて見せよ」とシテに向つて藝人に要求するやうな要求をしてゐる。これはあきらかに遊藝としての狂舞といふものがあつて、それを能の悲劇的な狂亂の所作と、結びつけ融合させようとしたものである。

前節の例について、遊藝性をあにはしてゐるものを見るのに、その對象によつて四種に區別することができる。第一種はイ、ロ、の場合で、神前で舞を奏して神意を慰めようとしてゐるのである。第二種はハ、ニ、の場合で、貴人の前に舞つて、その心を慰めようとするのである。第三種はト、リ、カ、ヲ、などの場合で、群集の前で舞つて見せるのである。タ、レの場合もこれと同じである。タ、レ、の例は所謂遊狂物といはれるもので精神的な「狂」の意味がなく、從つて一應物狂と區別せられるのであるが、遊藝性といふ見方からすれば區別の必要がなく、自然居士でも東岸居士でも花月でも放下僧でも、藝として狂つて見せてゐるだけなのである。

以上の三種はあひては異つても、何れも藝を觀覽に供

するのである。所謂「狂ひ」であるからそれは普通の藝よりは絢爛であり燥急であつて眼をそばだたせることが著しいから、觀せるものとしての效能が多いに相違ない。しかしこのことはまた能の物狂の起源をも語つてゐると思はれる。すなはち神前に奏する巫女の舞——物に狂ふ所作——からはじまつて、やがてそれが藝能化されるとともに貴人の觀覽に供して貴人の心を慰めるてだてとなり、下つては一般の人への見せものともなつたといふことである。これについては細說する必要があるが、今は略する。大體のことは我が國の藝能史が示してゐる事實であり、能においても、翁や脇能物に神前に遊舞する跡をのこしてゐるし、能一般が神佛の寶前に奉納するもの——法樂——として演ぜられるといふことにも、そのあとが殘つてゐる。また能の發達が足利義滿はじめ、多く貴人の觀賞に供するためであり、やがてそれが一般にも及んでいつたことが、第一種から第二種へ、第二種から第三種へと進んでいつたあとを示してゐるといへよう。

ところで先にも述べたやうに、物狂の大部分は女物狂であること、右にあげた三種のシテはみな女性であるといふことには、鬘物的幽玄性をあらはさうとするねらひからである、といふ意味は濃厚にあるのではあるが、しかし歷史的に見れば、由來するところは別にあるのである。それは女曲舞が盛行してゐたので、それがとり入れられてゐるといふことである。能が曲舞をとり入れて主要な部分としてゐるといふことは誰でも知つてゐることである。女曲舞については七十一番職人盡歌合に女曲舞圖があり、また後法興院記文正元年の條に「余聞抑件女曲舞、自去十月勸進、容顏尤美麗、舞拍子言語遒斷奇妙之至也」などとあることなど見ても、能の大成せられた前後の頃に女曲舞が盛行してゐた樣子の一端がわかり、能が巧みにそれをとり入れていつたことがわかるのである。

しかし更に物狂の藝能發生の起源を討ねる時には、我々は遙かな古代まで溯らなければならぬであらう。「ものくるひ」のものは靈物であつて、古代の人は人の狂ふのは神靈、死人の靈、動物の靈などが憑いて狂はすのであると考へたのであり、神靈の憑依して神意をつげるものとして巫女があつたのであり、巫女が神聖の場を廻つて踊り狂ふ動作が源流となつてゐると考へられる。この點については民俗學的研究が明らかにしてくれるであらう。ただこゝでは能の女物狂は一時の思ひつきではなく

古い源流を汲んでできてゐるといふことを述べるにとゞめる。

女物狂ばかりでなく、能の物狂一般が曲舞からきたものであり、その曲舞には靈物の憑依といふ考へ方の源流のあることを具體的に示してゐるのは歌占一番である。これはシテが謠を謠へば神がゝり狀態になつて、そこで「地獄の曲舞」を舞ふので、この「地獄の曲舞」が歌占の中で劇中劇のやうな形で演出せられるのである。つまりこゝで神がゝり狀態になるといふことと、曲舞を舞ふといふこととが、はつきりそのまゝに示されてゐるのである。これは一番の能としてはまことに素朴な形であつて、素材をそのまゝに持ち出してゐるやうなものである。

6

物狂の能には、古來の傳統をひく藝能としての「もの狂ひ」がとり入れられてあるといふことについては、すでに述べた。ところがその外になほ一つ注意すべき要素がある。たとへば三井寺で、狂女が鐘を撞いたのを咎められていひわけをするところに、

シテ　夜庾公が樓に登りしも月に詠ぜし鐘の音なり許さしめ

シテ　今宵の月に鐘つくこと狂人とてな厭ひ給ひそ、ある詩に曰く「團々として海嶠を離れ冉々として雲衢を出づ」この後句なかりしに「今宵一輪滿てり清光何れのところにかなからん」といふこの句をまうけ、あまりの嬉しさに心亂れ高樓に登つて鐘を撞く。人々いかにと咎めしに、これは詩狂と答ふ。かほどの聖人なりしかども月には亂るゝ心あり。ましてや拙き狂女なれば許し給へや人々よ。

とある。これらの文句は明らかに「詩狂」といふ文藝精神を能の「物狂」の世界に導入してゐるのである。こゝに能の新しい一つの精神を見ることができる。

「詩狂」といふのはいふまでもなく文藝に於ける忘我游神である。能が狂態を演出することによつてあらはさうとするものは、悲劇的狂ばかりではない。三井寺の如きは、恩愛故の狂をあらはしてゐるものでありながら、狂女が一たび鐘樓に登つて鐘を撞く時、俄然としてそこに今一つ別の世界があらはれてくる。それが文藝の狂——忘我游神恍惚の境であり、庾亮の詩や賈島の詩や、賈島の話を用ゐて作られた傳說やは、すべてみな、月光を媒介として忘我游神の縹渺世界をあらはし、狂とはさ

うした非現實、超現實をあらはす名だといふことになるのである。もつとも三井寺では親子の狂と詩狂とが木に竹をついだやうになつてゐて、一つの作品として十分融合してゐるとは云ひ得ぬけれども、それは作の良否の問題であつて、詩的精神の導入といふことは動かぬ。もつとも能といふ藝能が藝術的價値を有するといふことは、そこに詩的精神が生きてゐるといふことであるから、その點から云へば「詩狂」は支那の詩人から借り來つて導入されたのではなく、本來内存してゐる筈の、しかも本筋をなす筈の精神が、こゝではかりに唐人の詩をひくことによつて露頭したのであるといふこともできよう。

「詩狂」といふ語のほかに、今一つ「風狂」といふ語がある。

何故狂氣するぞと承る。人の心の花ならば風の狂ずる故もあるべし。況や階老同穴と契りし夫も行方しらで、殘る身までも道せばき、なほ安からぬ籠の中、思ひの闇のせん方なさに、物に狂ふは僻事か。（籠太鼓）

いつも常磐の三鈷の松蔭に立寄る春の風狂じたる物狂……（高野物狂―再出）

二例ともに風狂といふ漢語とせず「風狂じたる」と訓讀し、しかも何れも春風が花を散らずさまをいつてある。これは倭漢朗詠集の「落花浪藉風狂後、啼鳥龍鐘雨打ツ時」を直接うけてゐるからであらう。

だがこゝで問題にしたいのは、高野物狂（世阿彌）などの使つてゐる「風狂じ」は自然現象をいひあらはすだけで、人間の精神の中までいひあらはす意味はなかつたであらうか、といふことである。それについて想起するのは同じ時代の一休和尚の詩集に「狂雲集」のあることである。この中で一休は屢々自分のことを「狂雲」といひあらはしてゐるのであるが、「風狂」とも呼んでゐる。

佯歌爛酸我風狂。
風狂々客起狂風。
狂客江山三十年。

などの例を見ると、一休は風狂と自嘲してゐるのではあるが、そこには常規を破り凡常を超えようとする氣魄が流れてゐる。世阿彌の物狂にも、さうした文藝精神が、自覺せられてゐるとはいへぬであらうか。謡曲が屢々引用する朗詠にはそのやうな風狂は見當らぬ。自然現象である落花を歌つた「風狂じて」があるだけである。しかし、一休と同時代の能においては同じ「風狂じて」といひつゝもそこに新しい「風狂」の精神がこめられてゐる

のではないかと考へるのである。しかしこのことについてはなほ後考を俟つことにする。

7

以上のべたことを要約すれば、次の二點に歸するのである。

一、「物狂ひ」の藝は我が藝能史の上に長い傳統を持つてゐる。それをとり入れて、それに人情を中心にした劇的要素を濃く附與してできたのが能の物狂である。

二、支那の詩人にあらはれ、更に五山の文學などを通しで時代の新しい文學精神となつた（徒然草の冒頭の語なども參看すべきである）風狂の語と心とが、能にもとり入れられて、物狂ひに一つの精神を賦與し、忘我游神の境地を舞臺の上にもあらはしてゐるやうである。

本稿は昨秋の開校記念日に於ける研究發表（前々號に梗概の載つてゐる「物狂考」）に少しく增補を加へたものであるが、ほんの解説めいた考察に過ぎぬことをお斷りしておく。

大谷學報第三十六卷第四號（前號）目次

一、二種の否定……世良壽男
—慧の否定と悲の否定—
一、天台初期の禪法……安藤俊雄
一、教育の過程……前田博
一、中世武家々訓における儒佛受容の過程
……柏原祐泉
一、論註に於ける一心釋の意義……永田敬信